

翻
訳

Charlotte M. Brane 著 『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』(翻訳・その20)

堀 啓子

これまで『東海大学紀要 文学部』に連載してきた本稿は、『東海大学紀要 文化社会学部』に稿を移し、引き続き、『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』の翻訳を掲げる。原著は長編物語であるため、分載二十回目となるこのたびは、第二十五章の訳を掲げることにする。猶、原著も引き続き Dodo Press の二〇一〇年リプリント版に拠るものとした。

*本稿は、科学研究費補助金【基盤研究(C)】「課題番号：21K00290」による研究成果の一部である。

二十五章

緑の木陰ではなく、ロンドンの賑わった舞踏会の場で語られてはいたものの、それはかわいらしい恋の物語であった。エアリー卿が自分に気を惹かれているのか、ということに始まり、最終的には自分も彼を愛しているのか、という問題をベアトリスは考え続けてい

た。

今度は、他愛もない子供の遊びではなかった。ベアトリスにとつて、ひとたび誰かを愛すること、永遠に全身全霊を込めて愛し続けるということであり、それは冷めた、物質的な考えを持つ人々には理解すらいけないものだった。

そしてついにエアリー卿の姿が他のすべてから浮き上がって見え、彼の名が音楽の様に響き、他の誰の顔も目に入らず声も耳に届かず、彼のこと以外何も考えられないようになった。彼は少しは望みがあるように思い始めた。あの誇り高く美しい表情が、他の誰に対してもありえないが彼に対しては和らいで輝き、他の誰かの場合とは異なって、あの輝く濃い色の瞳が彼と目を合わせることなく、彼の面前ではあの生き生きした言葉の数々は聞かれなくなった。このすべてを見ていたエアリー卿は少し望みを見いだした。

生れてはじめて、彼は相当の財産のある高い地位の家に生まれたことを誇りに思い、喜んだ。以前はそのようなものにそれほどの価値を見いだしていなかったが、今では、とても美しくそれらにふさわしいベアトリス・アールに財を費やし贅沢な品を惜しみなく与えられることが嬉しかった。

エアリー卿は自信がなかった。うまくいくとは思えないときもあった。真実の崇高な愛情を持った恋人は、おそらくいつも臆病なものである。アール卿は、何週間にもわたって目の前で繰り広げられるこのへかわいらしい芝居を観て微笑んだ。そしてヘレナ夫人は、エアリー卿自身がロンドン一美しく誇り高い彼女が自分を受け入れてくれることへの可能性を考えるずっと前から、いったいいつこの若者は「口火を切るのか」と考えていた。

一日たりとも彼は彼女に会わずには済まなかった。彼は倦むことなく、彼女が参加する舞踏会や夜会、オペラに顔を出した。彼は彼女に付き従う影で、彼女がいなければ楽しむことなく、日がな一日彼女のことを考え、毎晩彼女の夢を見ていたが、結婚を申し込むことで彼女を失ってしまうという危険をおかすことを半ば恐れてもいた。

無関心な観察者にとっては、エアリー卿は端正な姿の、親切で誇り高い若い男性だった。知的で、少し冷笑的なところもあり、気前が良く、優れた芸術の偉大な後援者であった。ベアトリス・アールにとって、彼は高貴で、賞賛されるべき理想の人物だった。彼は王

子だった。誇り高い彼女の心は魅了された。彼女は彼を愛しており、他の男性の最愛の妻たることよりも、たとえ無視されようとも彼を愛する妻となりたいと、独りごつのだった。

彼女には多くの賞賛者がいた。(美貌のアール嬢)はこのシーズンの華だった。もし彼女に少しでも媚びたところや浮ついたところがあれば、ここまで追いつめられたりはしなかっただろう。紳士たちは、忠誠を示す自分たちに対して、ただ無関心に誇り高く美しい表情で応ずるだけの彼女に強く惹かれていた。

時々、ベアトリスはエアリー卿が自分を愛していることを確信できた。だが突如、彼女の恋人は臆病な気持ちに捉われてしまい、するとまた彼女の確信も揺らぐのだった。ひとつだけ、疑いの余地がないものがあつた——それは彼に対する彼女の愛だった。もし自分の夢見ていることがすべて誤解で、彼が彼女に求婚などしなかったとしても、他の男性の妻には決してなると彼女は自分に言い聞かせていた。

ヒュー・ファナーリーの記憶は時々よみがえつた——だがそれほどしょつちゆうでもなく、大した恐れや心配もなかった。それは現実というよりもむしろ、暗く不快な夢のようだった。このベアトリス・アール、あの誇り高く高貴で、あれほど厳格で誠実で名誉を重んじる父の娘である彼女が、それほどおかしな馬鹿げたことをしでかしたはずがあるか？ 思い出すといつも顔が真っ赤になり、彼女はその思いに耐えられず、急いでその記憶を追いやってしまうのだ

った。

あの七月一五日が近づいてきたが、それでも彼女は恐ろしいとは思わなかった。彼が戻ってくることはないであろうし、彼女のことなど忘れてしまっているだろう。彼の姿と言葉は鮮明に覚えてはいるが、彼女が恐れるようなことは起きないだろう。

もし彼がシーベイに行き——エルムスに行つたとしても、彼女がどこにいるかを突き止め、あの馬鹿げた約束の執行を求めることなどできないであろう。最悪、彼女がアール卿の娘であることを彼が突き止めたとしても、彼女の地位と立場に彼は怖気づいて怯むだろう。このようなことを彼女は滅多に思い出すことはなく、思い出しでも即座にこんな考えを追い払ってしまうのだが、彼女はそれをあのエルムスでの死ぬほど退屈だった日々を目新しさと興奮を与えてくれたことへの高い勉強料と認識していた。

旋風と動乱のロンドンの社交界シーズンのさなかに、自分の人生の幸福を賭したりスクを負うべきかどうかを自問していたエアリー卿は、アール卿がアールズコートに戻る時期を待ち、そこについて行つた。

その夏はもう暑くなり始めていた。サンザシとリンゴの花はもう枯れていた。トウモロコシが金色に色づいて畑に揺れていた。干し草はすべて集められ、果樹園の果物は豊かに実っていた。七月十五日——ベアトリス・アールが心中で半ば恐れていたその日——は過

ぎ去つた。その日が来ると、彼女は神経質になつて半ば怯え、ドアのベルが鳴つたり、速い足音が響いたりする度に、驚いて顔面蒼白になつた。その日が過ぎると、彼女は自分を笑つた。どうして彼女を見つけれようか？アール卿の美しい令嬢と、商船の船長であるヒュー・フアーナリーにどんな接点があるうか？せわしなく求められ、分別なく交わされた、他愛もない馬鹿げた約束の他には何もなかつた。

ロンドンを離れる前日、アール卿は幾人かの友人に出会うという約束があり、ブルツカーの店を訪れた。そこにいると、一人の紳士が店に入ってきたが、その姿は彼の注意を強く惹きつけた。——この若い紳士は背が高く堂々としており、気品のある頭が幅のある肩の上に乗っていた。顔立ちは整つて男らしく、きびきびとした動きには品があつた。——その瞳は澄んで輝いていたが、その瞳が炎と光を浴びて輝くと、微笑する女性の表情のような柔らかみを帯びた。アール卿は彼を熱心に眺めた。この頭の格好と顔立ち、誇り高いがどこか優美な身のこなしに、彼は見覚えがあつた。

「あの人は誰ですか？」と彼は友人のランドン大佐に尋ねた。「以前に会っているか、夢にでも見たような気がするのですが。」

「彼を知らないだつて？」と、大佐は叫んだ。「あれはライオネル・ダツカー、(君の後継となる身内)だろう。もし私が間違っていないければ、だが。」

喜びと痛みがアール卿の心の中で交錯した。多くの代償を払うことになったあの馬鹿げた行動をとるずっと以前、ずっと昔に、彼はライオネルを知っていた。ライオネルは彼と共にアールズコートで過ごしていたことがあった。彼は、ハンサムで元気のよい、誇り高く血気盛んで、むこうみずながら勇敢な、過ちには寛大だった少年を思い出した。彼は、卑しいことや卑怯なことをひどく嫌い、誠実で高潔で——だが欠点は、冷静で落ち着いた思念の欠如だった。

ライオネル・ダッカーはその当時、貧しかった。今では彼はアールズコートと爵位の後継者であり、ロナルド・アールは支持しない政党の支持者だった。そして大きな館と彼の父親が高く評価していた美しい領地を受け継ぐ者だった。彼自身に息子がなく、したがって決して後継者を育てることもできないという事実を思い出すと、彼の心には喜びと傷みが奇妙に入り混じった。今では立派な男性に成長した、あのハンサムな少年がいつの日か彼の立場を受け継ぐのだった。

アール卿はその部屋を横切って、この若い男性にまっすぐに近寄り、その肩に優しく片手をかけた。

「ライオネル」と彼は言った。「以前に会ってからずいぶん時間が経ったが。君は私を覚えていないだろうか？」

率直な澄んだ瞳が彼をまっすぐに見た。この正直なハンサムな顔を見て、アール卿の心は温かくなった。

「全くです。」とミスター・ダッカーはゆっくりと答えた。「以前にお目にかかったという覚えはありませんが。」

「では、私はずいぶん変わったにちがいない。」とアール卿は言った。「最後に会った時、君は十二歳かそこらで、イートン校に戻る日に、君にへちよつとしたアドバイス」をしたらどう。チャーリー・ピリヤーズも一緒だったね。」

「それではあなたはアール卿ですか。」と、ライオネルは答えた。「あなたにお会いするためにロンドンに来たのです。」そして彼は顔を赤らめ、握手の手を差し伸べた。

「君にずっと会いたいと思っていた。」とアール卿は言った。「だが私は長らくイングランドを離れていた。もっとよくお互いを知りあおう。君は法律上の私の後継者なのだから。」

「あなたの、何ですって？」と、ミスター・ダッカーは不思議そうに言った。

「私の後継者だ。」とアール卿は応じた。「私には息子がいないから、私の財産は限嗣相続されることになり、君が後継となる近親者だ。」

「あなたにはたくさんのお子さんがいらっしやると思っています。」とライオネルは言った。「あなたの恋愛結婚については少し伺

っていました。今では美しいアール嬢の噂でもちきりですね。」

「私には息子はいないのだ。」とアール卿は悲し気に割って入った。

「先週、君に私の家を訪ねてほしいと手紙に書き送ったのだが、君はどこかに家があるのだろうか？」

「いいえ。」とこの若い男性は楽しみに言った。母はカウズに住んでいますし、私はずっと母と一緒にいたから。」

「では今はどこに？」と、アール卿は尋ねた。

「ポイント大佐の部屋です。彼としばらく過ごそうと約束していました。」とライオネルは答えたが、少し当惑しているようだった。

「約束を破ってくれと言うべきではないね。」とアール卿は言った。

「だが今夜は我々と夕食を共にし、ポイント大佐の家を出るときには、我が家に来てはくれないだろうか？」

「喜んで伺います。」とライオネルは言い、この二人の紳士は一緒にブルツカーズを出た。

「レディー・アールと娘たちに君を引き合わせねば。」と、並んで歩きながらアール卿は言った。「私はずいぶん長い間、家や友人たちから離れていたから、誰にしろ血縁だというのは妙な感じがするよ。」

「故郷で幸せに暮らしているときに、アフリカの灼熱の太陽に焼かれたというあなたの夢は、私にはまったく理解できませんよ。」

「君は知らないのか？ なぜ私が外国に行ったのか聞いていないのかい？」と、アール卿は重々しく言った。

「いいえ。」とライオネルは答えた。「あなたが去ってから、お父様にアールズコートにお招きいただくことはありませんでしたから。」

アール卿はこの後継者に、彼が父の気に染まぬ結婚をした結果、二度と許されることはなかったことをかいつまんで話した。

「ではあなたはすべてを捨て去ったのですね。」とライオネルは言った。——家も友人も地位も、その女性への愛のために。奥様は、その愛情にふさわしい女性だったのですね。」

突然の痛みで、アール卿は蒼白になった。果たしてドラは愛情に値したのだろうか？ その代償にふさわしかったのだろうか？

「君は私の後継者だ。」と、彼は重々しく言った——「私の一族の一人だ。ライオネル、君が我々の輪の中に入って、私の地位を継ぐ前に、私が妻と数年前に別れて二度と会わないという話を話しておかねばならない。彼女の話ししないでほしい——傷つくのだ。」

ライオネルは悲し気なその顔を見た。今は、その顔の陰を認めるこ

とができた。

「申しません。」と彼は言った。「奥様はきつと——」

「もう止めてほしい。」とアール卿はさえぎった。彼女を悪くは思わないでくれ。彼女は自分の意思で去ったのだ。母が私と住んでいる。母は君に会えたら喜ぶだろう。では覚えていてくれ——七時ちょうどに。」

「忘れません。」とライオネルは、彼の悲しそうな言葉と声に心を痛めながら答えた。

家への帰途、長い年月で初めてアール卿は、少し優しく和らいだドラの記憶をよみがえらせた。「奥様はきつと——」ライオネルは彼女をどう思ったのだろう。彼らが離婚したのを見て、あの若い後継者が思ったように世間もまた——ドラが咎められるべき存在だと——例えば、犯罪者か何かと判断する、ということがありえるだろうか？そして彼女は生涯に、彼以外の他の誰かのことを想うことがあっただろうか？いや、あの彼女の過ち——彼が許すことのできない——あの過ちは、彼への深い愛情に根差したものだ。哀れなドラ！あの可愛らしく、頬を染め、愛らしく恥じらいを含んだ眼差し、バラのような唇が眼前に浮かんだ——そして純な、少女らしい愛情と、優しい崇拜。もし他のことであつたなら、別の過ちであれば、その場でロナルドは彼女を許したに違いなかった。だがロナルドの心は、あの忌むべき情景を思い出すと完全に委縮するのだった。

「いや。」とロナルドは言った。「許すことも忘れることもできない。人はドラに敬意をはらうだろう。誰も彼女を誤って判断したりはしないに違いない。私は彼女を自分の心にも家にも二度と連れ戻すことはできない。死の床で」と彼はつぶやいた。「私は彼女を許すだろう。」(以下、次号)